

## 猫は重要な役割を果たしていた

里草会顧問 福井正樹

空襲に脅かされる騒々しい大阪西成区から、雪深い但馬の祖父母の家に疎開した最初の頃である。大きな藁屋根の下で、雪が軒先に積みあがっている時は、何の物音もしない。藁屋根は断熱も防音にも効果があり、それに雪が積もるとすべての音が吸収されてしまう。大阪では体験したことがないお腹一杯のご飯を食べ、囲炉裏の傍で半分眠りかけ、こたつで温かくしてある布団に入ろうとした時だ。

突然天井で大男達が入り乱れて暴れ、駆け回るような轟音が響き渡った。私は恐怖に喚き声をあげながら、引きつった顔で囲炉裏の傍に駆け戻った。祖父はこともなげに「ヨメさんじゃ」と言った。この恐ろしい騒ぎに慣れるのに長いことかかった。相撲を取るようにくんずほぐれつ、また駆け回るように聞こえる頭上の騒ぎは、突然発生してなぜかピタッと静かになる。あの小さなネズミが発する音とは思えない大きな音だ。

囲炉裏とかまどの上は吹き抜けになっていて、煙はここから二階部分に充満する。しかしそれ以外の二階部分はしっかりした床が設けられていた。土間や牛小屋には天井が無いが、他の座敷の部分は天井が張られていた。ここでネズミの運動会が始まると、驚くように大きな音がする。

三階に当る藁屋根の合掌部分は、篠竹を並べた床にむしろが敷いてある。この三階部分は冬中使う藁や柴が蓄えられていて、二階部分に充満した煙はこのむしろの間を通過して破風から外に排出される。だからいつも乾燥していぶされているようなものだ。篠竹は華麗な煤竹になっていた。二階の床の上には、土間などの部分に雑穀や米俵などの食糧や、草鞋や草履・縄やむしろなど消耗品の作りためたものが蓄えられている。

座敷部分の床の上には昔からのあらゆる道具がしまわれていた。むしろを織る機もあれば、繭の糸をつむぐのに組み立てる装置もある。蚕棚の材料や用具もあるし、俵などを編む道具が何組もしまわれている。使われなくなったものも奥に押し込められていて、叔父はそんな中から稲を通して粃を取る、千歯を探し出してきて、種もみを丁寧に採っていた。

ネズミにしてみれば、暖かくて乾燥していて、食料もかじる木製の箱などもあるので住み心地がよかったのだろう。たまに来ていた高齢の猫が居なくなってしまうと、ネズミはますますはびこった。祖母は「猫は年に米一俵食う」と言って猫を飼うのは消極的だった。さまざまなネズミ取りを仕掛け、水を入れた壺にもみ殻を浮かべてネズミを溺れさせる仕掛けも作ったが、少しも減らない。

蔵のしっかりした木組みの長持ちも齧るし、しまっている客用の布団の中に巣をするし、積み上げてあるカマスや俵をかじって中のコメや雑穀が流れ出て崩れてしまう。私が小学校になった頃に、とうとう猫を飼うことにした。頼んであった下の家の猫が4匹の子供を育てていたが、なぜか親猫が帰ってこなくなったので、目が開いて間もない小さな子猫を引き取った。どれでも持って行ってくれと言われて貰って来た三毛猫が、一番器量よしだ

ったと祖母は喜んでいた。そして私にもよくなつて、よく遊んだ。早く親猫と離されたので、しつけが十分ではないが、その分誰かにくっついて廻る。布団に入れて寝たら、便をしたこともあった。

三か月もたつと、呼べば必ず私のそばに来るようになった。煮物やみそ汁には大きなだしじゃこを入れてだしを取る。だからみそ汁にも煮物にも、出がらしのじゃこがはいっている。それを噛んで食べると骨などにいいというのだが、私はどうしてもそれが嫌いだった。残すと箱膳の汁椀にいつまでもその雑魚が残る。これを猫に食べてもらうのだ。だから食事のときに三毛（ミケ）と呼ぶと、どこに居ても跳んでくるようになった。

祖母は猫のためにぼろを丸めたボールを作り、かもしからぶら下げた。子猫はこれを揺らしたり飛びついたり追っかけたり実によく走り回った。私もいろんな猫じゃらしを作って、猫と飽きずに遊んだ。イナゴやカマキリなども捕まえてくるようになった。座敷の敷物の下などに、トカゲなどが平たい干物になっていることもある。捕まえてきて遊んでいるうちに敷物の下に潜り込み、そのまま死んでしまったものなのだ。

秋の取入れが進み囲炉裏の傍で家族がくつろぐ季節になると、猫も成長して子猫の頃のようにじゃれるのも少なくなり、膝の上で眠るようになる。猫屋と言っていたが、猫が丸くなくなるとはいれる程度の箱が、囲炉裏の火に向けて置いてある。この箱の中にいると、周りの風も防ぐし、そんなに煙も入り込んでこない。踏み台にもなるので、時には神棚の灯明を灯す時などに猫ごと持って行かれる時もあるが、家族の一員として囲炉裏の縁に居場所が確保されていた。

秋の取入れが終わる頃に、天井裏のネズミも増えてくる。夕食の後、大人たちが夜なべをするようになると、猫は首をつまんで土間に投げ出される。まして天井裏でネズミの音などしたら、そこに放り込んで閉じ込められる。私が布団に抱いて眠ることも禁じられ、分かんると首をつかんで引きずり出された。何度も繰り返されると、夕食が終わるころには、コトコトとはしごを伝って二階や三階に上り、ネズミを見張る。

ネズミを初めて捕まえて来たときには私に見せて、もてあそんで転げまわっていた。みんなから褒められるので、私は自分の手柄のように嬉しかった。農家に飼われている猫はいまのペットの猫とは全く違う。夜になると糶倉の隅で見張っていたり、扉を細く開けてある蔵の中も巡回するし、障子にも一コマ通る場所が開けてある。深夜までコトコトと家じゅう巡回する。時には一晩に3匹もネズミを獲り、最後には音を立てて齧って食べるが、さすが半分ほど残すこともあった。

お勤めがすむ深夜に布団にもぐりこんできて、冷たい足を私の肌に付けるので目が覚めることもある。ネズミの跳梁もまったくなくなると、どんなにくつろいでいても猫は許される。私にはよくなついたので「猫は家に付く、犬は人に付く」というのは逆だと思っていた。しかし猫には自分の獵場の縄張りがあって、人が引っ越してもそこに残る。犬は家族について移る。借りてきた猫というが、このなわばりを外されるとしょんぼりして、あまり騒がないものなのだ。